

檜原市昆虫館だより

G O N T A

(通巻39号)

Vol.10 No.3



第12回特別展

南の森の物語

八重山の自然誌

2000年
8月1日火 ↓ 10月9日祝

●開館時間 午前10時～午後5時(10月以降は午後4時まで) ●月曜休館

Photos: Hiroshi Yamaguchi Design: Tsuyoshi Endo

檜原市昆虫館

〒634-0024 奈良県檜原市南山町624 Tel.0744-24-7246
観覧料: 大人310円・学生210円・小人100円(30名以上の団体割引あり)

第12回特別展

南の森の物語～八重山の自然誌

平成12年 8月1日(火)～10月9日(月)

檜原市昆虫館二階展示室にて

《はじめに》

檜原市昆虫館は開館以来、亜熱帯の花咲き、蝶の飛び交う温室で、皆様に親しまれてきました。蝶や植物の故郷は、沖縄県南部の八重山諸島です。その中の石垣島には昆虫館の栽培場もあり、馴染み深い地域であります。

そこで、第12回特別展では、南の森から様々な生き物が織り成す物語をお届けしようと思います。

ここ奈良とは全く違う生き物や、今まで出会ったことのない昆虫たちが登場することでしょう。同時に、人間の歴史や文化・生活も垣間見えると思います。

「南の森の物語」どうぞお楽しみください。

檜原市昆虫館長 坂本善重郎

《南の森から、特別展へ》

特別展の舞台は、日本の南端(北緯24度20分・東経123度50分)、亜熱帯の八重山。中でも、西表島は青い海とサンゴ礁に囲まれ、緑濃い森に覆われ、沢が幾つも伸びて蛇行する美しい島です。

これから登場する生き物たちは、少し目線を落として耳を澄ませば、身近な存在だと気づかせてくれるものばかりです。よく“原自然が残る日本のアマゾン”と表現されますが、本当の西表島は、どこまで行っても心地よい人間の匂いを発しています。

今回の特別展から、南の生き物たちと人間の匂いを感じていただけたら嬉しく思います。

山口 大志(西表野生生物保護センター)

「やあ、みんな。おはよう。今日は記念すべき日だ。地上に出てから55,000回目の朝なんだよ。そこで、考えたんだ。今まで、ずっと黙りこくっていたけれど、これから、私の見たこと、聞いたこと、知っていることをすべて君たちに話していこうと思う。」

ここは、八重山諸島の森の中。樹齢150年はあるかと思える“オキナワウラジロガシ”の大木が、周囲に転がるドングリたちに向かって、穏やかに話を始めました。“語りベガシ”と呼ぶことにしましょう。

おやおや、ドングリたちはまだ眠っているのか、返事がありません。物憂げに聞いているのは、株元に寝そべっている“ヤママヤー”だけです。



▲イジュの花

紹介が終わるころ、辺りは薄暗くなってきました。

「語りべさん、暗くなってくるよお。」

「おや、どうしたの？震えているの？夜がやってくるだけだよ。もうすぐ光でいっぱいになるから、周りを見渡してごらん。」

語りベガシの言葉が終わらぬうちに、林床でヤエヤマボタルが光り始めました(表紙写真)。幼いカシは、光の波に包まれています。

「この輝く波は、まもなく消えるけれど、何も怖がることはない。私は、君が大きくなって私を超えるまで、ずっと見守っていよう。」



▲交尾するイリオモテボタルと、卵を抱きながら発光するイリオモテボタルのメス(円内)



▲リュウビンタイからスダジイの新芽が顔を出す

語りベがお話を始めてから、300回目の朝。落ち葉の下に埋もれていた、大きな大きなドングリ(オキナワウラジロガシ)が芽が出しました。

「語りベガシさん、はじめまして。あれれ、どこにいるの？それにここはどこ？緑がいっぱいだね。」

「やっと、目覚めたかい？小さな君から私の姿は見えないかもしれないな。さあ、上をごらん。この森(照葉樹林)に住む、君の仲間たち(植物)を紹介しよう。君の横にいるのはリュウビンタイ。それから、今満開の花がイジュ…」

一緒に語りべの言葉に耳を傾けてみましょう。



▲サキシマドボタルの交尾(左上)・キイロクシヒゲボタルの成虫(右上)・ヤエヤマボタルのメス成虫(左下)・食事中的オオシマドボタル幼虫(右下)

「語りべさん、ホタルの話を教えて。」

「君の横で光っているのはオオシマドボタルの幼虫だ。カタツムリを食べているだろう。イリオモテボタルはヤスデ^{はね}を食べるんだ。メスは大人(成虫)になっても翅がないんだよ。そうして、卵を産むと餌も食べずにじっと卵を抱いて守るんだ。」語りベガシのお話は夜明けまで続きました。いつのまにか、幼いカシは、夜空に映る梢の影ですやすやと眠っていました。

そのころ、人間の世では、江戸から明治への夜明け、時代の転換期を迎えていました。

幼かったカシは、少～しずつ大きくなっています。そんなある日、人間が森にやってきました。地面に生える^{きのこ}茸を採っています。

「あれはシロアリタケ。地中にある台湾シロアリの巣から生えてくるんだ。人間にとっては御馳走らしい。羽アリは嫌われているようだがね。」

「語りべさん、人間は森の外に住んでいるけど、森の仲間ともおつきあいがあるんだね。」

「ああ、そうだ。キノコの他にもオオタニワタリ等の食べ物を採る。それに、クバやクロツグ等道具を作る材料も集めて来るよ。人間もこの島の森の仲間なんだよ。」



▲ヤエヤマミツギリゾウムシの成虫

それから20年経ったでしょうか。若いカシは、すっかり若者のカシになり、見るものすべてが不思議で、毎日、語りべを質問攻めにしています。

「語りべさん、あそこのカンコノキの葉っぱを食べている毛虫(幼虫)は何？」

「あれは、ヨナグニサンだよ。日本で一番大きな^が蛾になるんだ。トゲだらけで全身口で覆われているだろう。」

「あの虫の音は？」

「葉っぱの上に虫がいるのが判るかい？ 声の主、クサキリモドキだ。葉っぱそっくりだろう。」

夜になってもおしゃべりしていると、急にみんな静まりました。一人の若者が必死に走ってきます。

「炭坑の人だよ。厳しい労働と生活に耐え兼ねて逃げてきたんだ。何とか、みんなで守ってあげよう。」

すぐに追っ手が迫ってきます。ヤママヤーが若者を導くように走ります。一方、語りべの合図で、森の大木たちは枝葉を揺らし、動物たちは声を上げました。びっくりした追っ手は方角を間違い、若者を見失いました。

夜明けに戻って来たヤママヤーが若者の無事をみんなに知らせました。



▲台湾シロアリの羽アリ(左上)と、地中の巣(右下)

カーンカーンカーン…ドドーン。森の中に音が響き渡ります。手に手に斧や鉋を持った人達が木を倒しています。新しく家を作るために、建築材料のシイやカシを伐り出すのです。

「この木は、いい形じゃないな。あっちにしよう。」

どうやら、若いカシは、ひん曲がった樹形のおかげで難を逃れたようです。

「ああ良かった。でも、兄弟が減ってしまったよ。」

「その代わり、君の周りに光が降ってくるだろう。」

語りべの言うとおり、若いカシの木にサンサンと太陽が降り注いでいました。



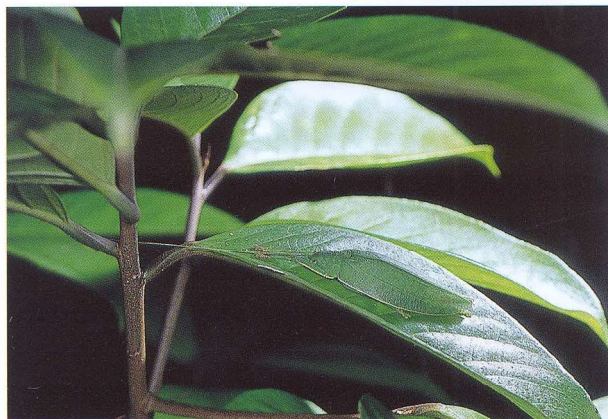
◀ヨナグニサンの卵



▲若齢幼虫



終齢幼虫▶



▲葉っぱに擬態するクサキリモドキの成虫



▲イリオモテヤマネコの食痕(シロハラクイナ/左上)と、足跡
イリオモテヤマネコの餌動物(オオハナサキガエル・サキシ
マハブ・マダラコオロギ・ヤエヤママダラゴキブリ)

いつもの年より早く、大型の台風がきました。凄まじい雨と、何もかも飛ばしてしまう風が三日三晩続きました。

「おーい、みんな大丈夫かー？」

台風一過、語りベガシはみんなに声をかけます。若者カシは、小枝を3本と葉っぱを数十枚飛ばしただけで済みました。風の吹いてくる方向に大木があり、風よけになったのです。しかし、その大木は、太い幹が途中からポッキリと折れてしまいました。

よく見ると、大木の根際から小さな流れができており、水が流れていきます。

「きれいな水だね。ここには誰も住んでないの？この水は、どこへ流れて行くんだらう？」

「この水は、細い小さな流れから始まって、いくつもの支流が合流しながら、沢となって流れて行くんだ。沢には、沢にくらす生き物たちがいるんだ。例えば、トンボの仲間。イリオモテミナミヤンマや、トゲオトンボ、ヤエヤマサナエなど、いろいろな仲間がいるよ。それから溪流の近くにしかない甲虫もいる。ひっそりと静かに、たくましく生きている生き物たちだ。」

ヤママヤー(イリオモテヤマネコ)は、昼間はいつも、語りベの株元にて、夜になると、どこかへ出掛けて行きます。

ある日、ヤママヤーは、すっかり日が昇ってから、ケガをして戻って来ました。

「どうしたの？大丈夫？血が出てるじゃない。」

「捕まえたイノシシの反撃にあってね。でも、仕留めたよ。久しぶりの御馳走だ。」

ヤママヤーは疲れてはいるけれど満足気な様子。不思議に思って、若者カシは尋ねました。

「ヤママヤーは一体何を食べているの？どうしていつも夜出掛けて行くの？」

「僕たちは、コオロギやゴキブリといった虫、カエルに、ヘビ、鳥などを捕まえて食べるのさ。」

「じゃあ、ヤママヤーは、動物の王様だね。」

「だけど、ヤママヤーだって、死んだら虫などに分解されるし、糞にもいろいろな虫がやってくるんだよ。ヤママヤーの食べた痕(羽毛等)もそうだな。」語りベが教えてくれます。

「ふーん、森の中の生き物は、大きなネットワークでつながっているんだね。」

ちなみに、ヤママヤーさんは、何が一番好きなの？」

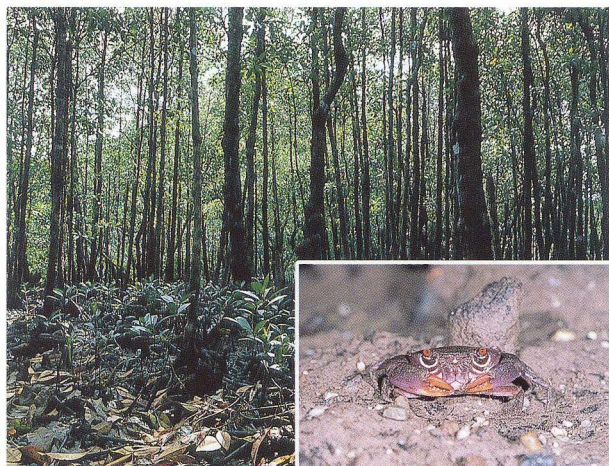
「zzz…」 ヤママヤーは寝てしまいました。



▲イリオモテミナミヤンマのメスの羽化(左)と、交尾(右)



▲交尾するスジダカヤセヒラタゴミシ



▲マングローブ林の中と、ヤクジャマガニ(右下)

ある日、オキナワウラジログシの住む森へ、一人の来訪者がありました。語りベガシも若いカシも聞き耳を立てています。

「あ、イワサキコノハ(コノハチョウ)。私の名前が付いているチョウだ。自分の発見した昆虫たちと出会えるのは楽しいな。」

どうやら、この人、たいそう博学で、生き物に興味があるようです。語りベの根元に腰掛けて、何時間も生き物を観察しています。そうして、チョウやセミのこと、天気や自然のことを次々と話してくれるのです。



▲ヒメウラボシジミ(左上)・タテハモドキ(右上)・コウトウシロシタセリ(左下)・卵を守るヤエヤマムラサキのメス(右下)

「語りベさん。そういえば、この間、見たこともないまだら模様のきれいなチョウを見たよ。」

「そうか、いいものを見たね。私も、これだけ長く生きていても、時折新しい発見をする。私たちの森には不思議がいっぱい詰まっているんだ。」

「もっと、チョウのお話を聞かせて。」

「チョウの中には、台風や偏西風によって、遠い島や大陸からはるばる飛んでくるものもいる。じっと卵の側にいて守る蝶もいる。ヤエヤマムラサキだ。それから、枯れ葉そっくりのチョウもいるよ。」

「わかった！コノハチョウだ。」

「おやおや、こんな天気の良い日に、何を物思いにふけているのだい？」

「ああ、語りベさん。川の流れにのった僕たちの落ち葉は、一体どこまで行くのかなあと思って。流れ着いた場所で、ただの塵になってしまうのかなあ。」

「いやいや、そんなことはないよ。葉っぱは流れ流れて、段々分解されて、やがて他の生き物たちの栄養分になるんだよ。そうやって、河口にできあがったのが、マングローブ林だ。そこには、マングローブ特有の貝やカニ、昆虫がたくさんいるそうだ。もっとも私は、まだ見たことはないがね。」



▲八重山の森の中と、コノハチョウ(イワサキコノハ/左上)

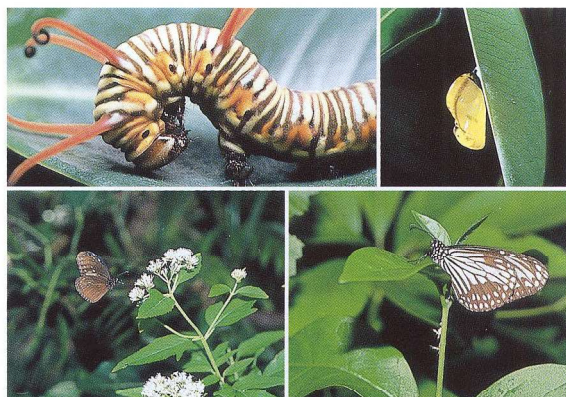
「語りベさん、今の人、物知りだね。」

「あの人は岩崎^{たくじ}卓爾さん。チョウやセミなどの昆虫を研究して発表しているそうだよ。昆虫だけでなく、いろんな事に詳しいんだ。」

「人間は、どうして僕たちの事を調べるの？」

「さあ、どうしてなのかねえ。ただ、私たちの住む南の森は、人間たちを魅了して止まないみたいだ。きっと、ここにしかない昆虫や生き物がいるんだろうね。」

「僕も、見たことのない世界に憧れるもの。人間も同じなんだね。」



▲ツマムラサキマダラの幼虫(左上)・蛹(右上)・オス成虫(左下)・ヒメアサギマダラ(右下)



◀海岸のモンパノキ
に集まるスジグロ
カバマダラ

▼ツダナナフシの顔



オキナワウラジロガシのドングリが芽を出してから、60年近い歳月が流れました。

八重山の島々の集落では、“土色の虫が来た”と、大騒ぎです。森にも風の便りが伝わっています。

「語りべさん、土色の虫って、何？」

「ウリミバエといってね、ゴーヤ(ニガウリ)などの野菜(実)や果物に大きな被害を与えるハエなんだよ。海外からやってきた虫で、よい防除方法がなく、大変な問題らしい。いい野菜や果実ができないばかりか、どこにも出荷できないからね。」

「小さな虫が、大きな問題を引き起こすものなんだね。なぜ、そんなことになっちゃったのかな？」

「難しい質問だ。私もよく解らないが、南海に浮かぶ島の宿命なのかもしれないな。」

更に引き続くように、戦争が起こってたくさんの人が犠牲になったり、時折マラリアが流行し人々が病に倒れていくなど、人里では悲しく辛いことが続いていきました。

しかし、その間も、セミやトンボなど昆虫や植物たちは、常に人間のそばに生活していました。

(後年、ウリミバエは“不妊虫放飼法”という画期的な方法で完全に防除されたのです。)



▲猟期前の罠作り(左上)・罠にかかったリュウキュウイノシシ(左下)・運ぶ(右上)・食す(右下)

オキナワウラジロガシは、森のこと、川のこと、マングローブのこと、チョウのこと…、様々なことを学びながら、僅かずつ大きくなっていきました。

今では、背は森の天井まで届き、幹は一抱えもある樹木になりました。カシは、自分のまだ見ぬ世界に思いを馳せています。

「語りべさん、海ってどんなのかな？」

「海には、森と同じくらい大勢のいきものが住んでいるそうだ。一度、見てみたいものだね。」

「海にも僕みたいな樹木があるのかな？海の水は塩辛いと聞いたけど、本当なのかな？」

「海辺によく行くチョウたちに聞いてみようか。」



セマルハコガメ



▲トビイロヤンマ

さらに、20年の年月が流れました。オキナワウラジロガシは、今や大木に育ちました。毎年のように、花開き、ドングリの実がなります。

ところが、折角地面に落ちた実も、リュウキュウイノシシが猛烈な食欲で片っ端から食べてしまいます。オキナワウラジロガシにとっては、自分の子供(どんぐり)が食べられてしまう訳です。

そして、森には猟師が罠を掛けに現れます。

「人間にとって、イノシシはおいしい食糧であり、一方で、作った田圃や畑を荒らす敵なんだよ。」

「それで、毎冬、イノシシを捕りに来るんだね。」

こここのところ、語りベガシの元気がありません。よく見ると、うろが段々大きくなっています。

一方、ドングリから育ったオキナワウラジロガシは、今や押しも押されぬ大木になりました。

「語りベガシさん、元気がないけれど、大丈夫？」

「ああ、もう歳だねえ〜。あちこち痛んできて。」

数日後、大きな台風が通過しました。森の中を強い風が吹き抜けます。

台風が過ぎ去ったあと、みんなびっくりしました。なんと、語りベガシが株ごと倒れてしまったのです。

「大変だ！何とかして語りベガシを助けなきゃ！」



▲スダジイの古木と、ヤエヤママルバネクワガタ(右下)

「語りべさん、逝かないで。まだ教わらなくちゃいけないことが山ほどあるよ。」

「私は、もう十分に生きました。次の世代にバトンタッチする時なのです。さあ、これからは、君が私の話を新しいいのちに伝えてください。」

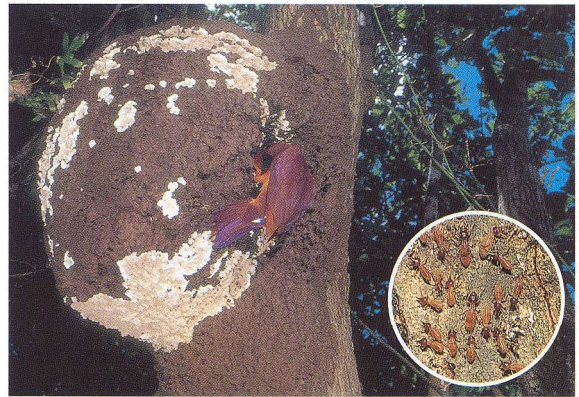
ありがとう。さようなら。」

その後、語りベガシが言葉を発することは二度とありませんでした。いつも語りベガシの根元にいたヤママヤーも、その日以来姿を見せなくなりました。

そして、翌年(1965年)、イリオモテヤマネコが発見されたのです。



▲祭りの風景(西表島)



▲タカサゴシロアリ(円内)の巣に営巣するリウキュウアカショウビン

しかし、語りベガシは静かに言いました。

「みんな、よくお聞き。ありのままを受け入れよう。たとえ私の命がなくなっても、私の体は、クワガタムシやカミキリムシの幼虫に家と餌を提供するでしょう。それにタカサゴシロアリにも、ね。シロアリの巣にリウキュウアカショウビンがやって来るかもしれない。」

何もかもこの世に生を受けたいのちは、必ず結末があるものです。でも、それっきりではなくて、ずっと繋がっていく、いろいろないのちに形をかえて、続いていくものなのです。」



▲色の多彩なオオヒゲブトハナムグリ

オキナワウラジロガシは、今や、森で一番大きな樹木になりました。樹上からは遥か人里や海まで見下ろせるほど。

樹冠では、花や実や新芽に様々な昆虫が次から次へとやって来て、鳥は枝葉でさえずり、トカゲやイモリは枝上を走り回っています。

しかし、当の本人(樹)は芽えない様子。

「語りベガシがいなくなっても、ヤママヤーがいなくなっても、時はずっと流れていくものだ…。」
オキナワウラジロガシは寂しいのでしょうか、独り言をつぶやいているのです。

人里からは今年も祭りの音が聞こえてきました。

オキナワウラジロガシが沈黙してから、随分時が経りました。

その間にも、マラリアの撲滅、沖縄の日本返還、ウリミバエの根絶等、いろいろなことが起こりました。ウリミバエは根絶されましたが、再侵入の危険性を考えて、現在も不妊虫放飼の予防策が取られています。マラリアも再発生しないように常に監視体制が敷かれています。イリオモテヤマネコについては研究が進められ、保護活動が展開されています。

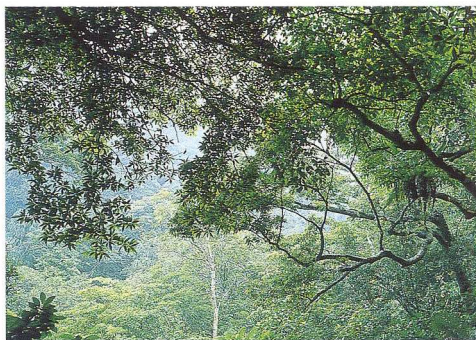
一方、島の人々の暮らしも、段々変わりつつあるようです。開発や観光の波は、八重山にも押し寄せ、南の森も無縁ではありません。

それらを大木は、じっと見てきました。

おや？根元には、まだ幼いヤママヤー(イリオモテヤマネコ)が寝そべっていますよ。



▲イリオモテヤマネコ(ヤママヤー)



▲ヤママヤーのすむ森

「やあ、みんな、おはよう。今日は記念すべき日だ。私が地上に出てから50,000回目の朝なんだよ。そこで、考えたんだ。以前に語りベガシさんが言い遺したとおり、これからは、私の見たこと、聞いたこと、知っていることをすべて、君たちに話していこうと思うんだ。語りべさんみたいにうまくは話せないけれど、今日が私の出発点だ。ドングリたち、聞いているかい？」

2000年8月。新しい語りベガシの誕生です。

南の森の物語は、これからもずっと続いていくことでしょう。いいえ、今度は、私たち自身が織り成していくべきなのかもしれません。南の森だけでなく、それぞれの故郷で。

[本号は、日比が担当しました。なお、写真は全点、山口大志(西表野生生物保護センター)提供です。]

いんぷおめいしよん

▶第12回特別展

南の森の物語～八重山の自然誌

期間：8月1日(日)～10月9日(月)

会場：樺原市昆虫館 二階展示室

▶秋の鳴く虫観察会

人里の自然が残る昆虫館周辺で、多くの美しい虫の声を鑑賞し、その主を観察してみませんか。

日時：9月9日(土) 午後5時～9時頃 [雨天中止]

場所：昆虫館集合～万葉の森(約3km)

対象：小学生以上で、親子又は家族単位

定員：50名

参加費：無料

持物：弁当・水筒・筆記用具・懐中電灯、等

(長ズボン・長靴等動き易い服装)

申込：葉書に、参加者全員の氏名・年齢・住所・電話番号を記入し、9月2日(土)まで(必着)に、昆虫館へご応募下さい。

▶特別展関連行事／第28回観察教室

「南の森の物語」

日時：10月8日(日) 午後1時30分～3時30分頃

場所：昆虫館会議室集合

内容：特別展にちなんだ工作をしたり、特別展の裏方を体験して戴きます。

対象：小学生以上 定員：35名

参加費：無料(要入館料／大人310円・学生210円・小人100円)

持物：筆記用具(工作等で汚れてもよい服装で)

申込：葉書に、参加者全員の氏名・学年・住所・電話番号を明記し、9月30日(土)まで(必着)に、昆虫館へ郵送してください。応募多数の場合は抽選。

樺原市昆虫館だより GONTA Vol.10 No.3

2000年(平成12年)8月25日発行 (通巻39号)

編集・発行／樺原市昆虫館

〒634-0024 奈良県樺原市南山町624番地

Tel.0744-24-7246 Fax.0744-24-9128

印刷・製本／株式会社 アイブリコム